

News Letter No.15

Contents

■ プログラムコーディネーターからのメッセージ
 ■ ユニット長からのメッセージ
 ■ GSS教員からのメッセージ
■ 第6回 GSS 国際アドバイザー会議 (GIAC) 開催報告
 ■ キャリアパスセミナー
 ■ GSS実習系科目報告会の開催
■ 博士論文研究基礎力審査 (QE) の実施
 ■ GSS履修生の紹介
 ■ 編集後記



プログラムコーディネーターからのメッセージ



寶 馨 防災研究所教授

グローバル生存学大学院連携プログラムは、京都大学の9つの大学院研究科と3つの研究所が連携し、安全安心分野の新たな学際領域である「グローバル生存学 (GSS = Global Survivability Studies)」を開拓することを目指す5年一貫性の博士課程教育プログラムで今年度(2017年度)が7年目になります。昨年度までに11人の博士学位授与者が出ました。プログラムを終え、アカデミア(大学)、地方自治体や民間企業に就職しています。今後の修了生の進路にご注目ください。

第6回 GSS 国際アドバイザー会議について

2017年1月24日～25日、第6回GSS国際アドバイザー会議(GIAC)が、京都大学稲盛財団記念館にて開催されました。今回のテーマは「科学と社会の連携：貧困に立ち向かう行動志向的かつ包括的アプローチ」です。詳細については「第6回GSS国際アドバイザー会議(GIAC)開催報告」をご参照ください。

キャリアパスセミナーについて

GSS履修生の皆さんは多方面で活躍することが期待されていますが、今後の進路の参考として各方面で活躍するグローバルリーダーによるキャリアパスセミナーを定期的に開催しています。2016年度には6回のキャリアパスセミナーが開催されましたが、今回は1月13日に開催された第2回キャリアパスセミナーについて紹介します。詳細は「キャリアパスセミナー」をご参照ください。

GSS総括シンポジウムについて

2011年度に採択された本プログラムの補助金期間終了の7年目に当たりますので、総括シンポジウムを、2017年10月6日(金)、7日(土)の2日間、アジア・アフリカ地域研究研究科・京都大学稲盛財団記念館3F大会議室で行います。皆様のご参加をお待ちしております。

ユニット長からのメッセージ



塩谷雅人 生存圏研究所教授

今回のニュースレターでは「GSS教員からのメッセージ」の記事として、情報学研究科の浅野准教授から、GSSが提供している選択必修科目のひとつである「情報分析・管理論」の紹介があります。あらゆる分野で大規模データの重要度が増している中、文理の分野を問わずデータの分析・管理技術が必要です。われわれがGSSの履修生のみなさんに何を学んで欲しいと思っているかを読み取って下さい。

GSSのユニークな教育プログラム中でもっとも重要なものとして、学生の実習系科目への参加があります。フィールド実習やインターンシップ研修などを自ら計画して実施し、学んだ成果については実習系科目報告会での発表が義務づけられています。昨年11月におこなわれた報告会の様子について「GSS実習系科目報告会の開催」で紹介しています。

本プログラムでは世界に通用する教育の質を保証するため、今春に修士課程を終えた本科生に対して博士論文研究基礎力審査(QE: Qualifying Examination)を実施しました。博士論文を書く資格があるか、その準備ができていないかを判断する重要な評価のタイミングとなります。詳細は「博士論文研究基礎力審査(QE)の実施」を参照してください。

このニュースレターでは毎回GSSプログラム本科生の皆さんの紹介をおこなっていますが、今回は5名の学生さんについて紹介します。それぞれ異なる研究科に所属し、問題に対するアプローチは様々ですが、各研究科で学ぶ専門知識に加えGSSプログラムで学ぶ学際的知識によって、社会のリーダーとなるべき人材が着実に育っていることを実感していただけることでしょう。

最後に、今年度(2017年度)に新しく加わった学生さんについて簡単に紹介します。L1(1年生)のプログラム履修者(予科生)として9名の合格が、3年次からの編入生(予備生)として3名の合格が決定しました。新しくGSSに参加することになった学生のみなさんに祝意を表するとともに、今後このGSSプログラムの中で国際的に活躍するリーダーとなるべく研鑽されるように期待します。

GSS教員からの メッセージ

浅野泰仁
情報学研究科特定准教授



選択必修科目「情報分析・管理論」の紹介

今日、あらゆる分野でデータの重要度が増えています。GSS 本科生のみならず、研究のためにデータを集めたり分析したりすることが多いと思います。実際、これからの時代は、文理の分野を問わず最先端の研究を進めていくには、大規模データの分析・管理技術が不可欠となっていくでしょう。選択必修科目「情報分析・管理論」及び「情報分析・管理演習」は、このような時代の変化を見据えて、研究科を問わず必要となるデータの分析・管理技術のエッセンスを提供するために作られた科目です。

これらの科目を提供している「高度情報教育基盤ユニット」という組織はもともと、全学・全研究科を対象に、コンピュータリテラシーのみならず情報の利活用を目的とした高度な情報教育を実施するために設置されたものです。したがって、本科目を受講する学生さんの所属研究科は多岐に渡っています。実際、2016 年度前期は、情報学研究科、総合生存学館、工学研究科、地球環境学舎、人間・環境学研究科、理学研究科、医学研究科の学生さんが受講しています。もちろん、その中には GSS 履修者の方々も含まれていて、非常に熱心に課題などに取り組みまわっていました。しかし、その数は GSS 開始以来まだ十名弱とまだまだ少ないのが現状です。みなさんには、この記事を読んで興味を湧いたらぜひ本科目を受講していただければと思います。また、我々のウェブページ (<http://www.iedu.i.kyoto-u.ac.jp/>) には、本科目以外の提供科目（大学院科目は全て「研究科横断型教育プログラム科目」です）、GSS の選択単位になります）も紹介していますので、ご参照下さい。

以下、本科目の概要を紹介します。シラバスでも概要を記載していますが、ここでは GSS 本科生のみならずが受講することを想定して、「それぞれのトピックがどんなときに役立つのか？」という視点で書いてみようと思います。

(1) 問題のモデル化・グラフ・アルゴリズム

コンピュータで現実の問題を解くための方法論の基礎となる「問題のモデル化とアルゴリズム」について学びます。これは、「新しい研究課題を（人手では時間がかかりすぎるから）コンピュータで解きたいけれども、どうしたらいいかわからない」ときに役立つと考えられます。

(2) 配列解析と形式言語

ここでは、医学・薬学・農学・生命科学等で用いられる「配列解析」と、情報科学の技術「形式言語」との関係を説明します。この内容は、情報科学の技術が全く関連なさそうに見える分野に適用された結果、「生物情報学」という新しい分野を開くほどに成功した事例の説明になっています。その基となる発想について学び、「自分の研究に、情報学の技術がどう活かせるのか？」ということを考えていただければと思います。

(3) データマイニング

データマイニングとは、最近 AI と呼ばれ注目されている機械学習やパターン認識等を含む「データから有用な知識を抽出する自明でない手法」の総称で、古典的な統計では出てこないような知識が得られる可能性がありますので、「データを集めて円グラフや棒グラフを描いてみただけでもいまいち」ときに役立つと考えられます。

(4) 情報の保管

情報を保管する上で重要な機能を提供するデータベース技術について学びます。情報の取得・共有・永続性・可用性に基づく考え方は、「Excel で開けないほど大きいデータがある」ときのみならず、「データを整理するときはどういったことに気をつける必要があるか」という点でも役立つと考えられます。

(5) 情報検索

情報検索の基礎技術を学びます。検索エンジンは便利な道具ですが、その仕組みを学ぶことで、どのような情報が獲得可能あるいは不可能なのかといった、「検索エンジンを利用する上で必要なリテラシー」を身につけることができると考えられます。

(6) 対話技術

せっかくデータを懸命に分析しても、他人への伝え方が良くないと、結果を社会に役立てることができないかもしれません。ここで学ぶのは、そんなときに役立つ、分析結果を人間にわかりやすくするための可視化技術およびユーザーインタラクション技術です。

また、「情報分析・管理演習」では、実際にプログラムを作成してもらうことで、授業の内容の理解を深め、技術を身につけられるようになっています。みなさんの GSS における学習・研究過程に本科目の内容が役立てば幸いです。

第 6 回 GSS 国際アドバイザー会議 (GIAC) 開催報告

GSS 特定准教授 清水美香

2 017年1月24日～25日、第 6 回 GSS 国際アドバイザー会議 (GIAC) が、京都大学稲盛財団記念館にて開催されました。今回のテーマは「科学と社会の連携：貧困に立ち向かう行動志向のかつ包括的アプローチ」。GSS 学生協議会 (GSA-EC) が中心になり、国内外からの 8 人のアドバイザーを迎え、GSS 内外の学生とも連携しながらこの難題に向き合いました。総じて今回の会議は、グローバルな視点から大きく 2 つの特徴があったと考えられます。

1 つ目は、2030 年に狙いを定め（「仙台防災枠組み」や第 21 回国連気候変動枠組条約締約国会議で採択された国際枠組み「パリ協定」にとって重要な年）、「科学と社会の連携」「行動志向」「包括的」といったキーワードを通して、「実施」に焦点を当てたことにあります。特に「貧困との対峙において科学者はどのような役割を果たせるのか」を念頭に、異なる角度から対話を通してその問いを追求する場をつくりました。

2 つ目は、そのアプローチとして上意下達（トップダウン）型と、積み上げ（ボトムアップ）型アプローチの両側面から、問題解決志向のアクションの検討を試みたことにあります。この 2 つのタイプのアプローチについて、「決して対立するものではなく、互いに調整され、調和されたものでなければならない一方、現実には互いに矛盾を生み出している場合も見受けられる」という問題意識から、敢えてこの両側面を浮き彫りにしながら問題解決方法が模索されました。

このように、今回の会議は小さいながらもグローバルな課題に立ち向かう上での革新的な 1 歩を示したといえます。様々な困難を乗り越えながらこのような問題提起とアプローチを編み出し、実践した学生達に大きな拍手を送りたいと思います。

大津山堅介 工学研究科 (L4)
2016 年度 GSA-EC 代表

G SA-EC は GIAC を開催するにあたり、2016 年 5 月からコンセプト設定などの準備を進めて参りました。今回の GIAC では昨年度の実践を踏まえ、リーディングプログラムとの協働、参加者間の交流を増やすため、新たに 2 つの事柄に挑戦しました。

まず 1 つ目は、リーディングプログラムである災害看護グローバルリーダー養成プログラム (DNGL) を招待したことです。DNGL は高知大学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、日本赤十字看護大学、千葉大学の 5 つの大学の協働プログラムであり、GSS と同じ安全・安心領域においてグローバルリーダーの育成に取り組んでいます。DNGL 側から「Poverty & Health」セッションにおいて発表して頂き、GSS と共通する興味関心や課題について異なる観点から討論することが出来ました。このような異なるアプローチを有する学生との交流は、互いに非常に有意義なものになったと思います。

2 つ目は、GIAC 史上初めてワークショップを導入したことです。この提案は、学生、先生方、国際アドバイザー間のより積極的な交流を促進し、一方通行の議論に偏らないように企画されました。ワークショップは、貧困の具体的な問題設定を行う Workshop I と、その問題解決の道筋を示す Workshop II を同一メンバーによるグループで行いました。このグループ分けは意図的に学生、先生方、国際アドバイザーを混合し、同じテーブルにて学術的対話が生まれるようにしました。参加した学生から、「先生方やアドバイザーと同じ目線で議論できたことは有意義であった」という感想を頂き、まさに意図したことが実現できたように思います。

以上のように、学生主体の GIAC を運営・実施できたことは大きな学びとなり、特にマネジメント能力の向上、他リーディングプログラムや国際アドバイザーとのネットワーク構築に寄与しました。最後にこの場をお借りしまして、GSS プログラムの先生方、GSS メンターの先生方、GSS 事務の皆様、国際アドバイザーの皆様により感謝を申し上げます。



Workshop in GIAC

キャリアパスセミナー
講師は ANA ホールディングス株式会社の金田晃一氏

浅井健介 教育学研究科 (L5)

「キャリア」という考え方は、通常、職業活動で得た専門技能の蓄積という観点から理解されることが多いと思います。金田氏はご自身のキャリアを例にご講演のなかで、本職には直接かわらない私的な活動が、実はネットワークの構築や見識の深化を通じてキャリア形成に大きく貢献することを指摘されていました（例えば発展途上国におけるNPO活動など）。そうした活動のなかで、自分が本当に好きなことを行い、それを積み上げてゆくことが、魅力的な人間に成長する鍵となり、キャリア形成の助けとなるのだといいます。こうしたご講話を「好きこそもの上手なれ」というよく知られた格言で締めくくられたのは印象的でした。

しかし、今日の学術領域では、好きなことを深めるための「私的な」時間をもつことが一層難しくなっているように感じます。「私的な」時間が、単に物理的な意味だけではなく質的な意味においても、研究者としての公的な活動に浸食されているように感じることがあります。例えば、GSSの活動は自身の研究領域から自由な課外活動を行う貴重な機会ですが、私的であるよりは公的な性格をもっています。その場合、その活動の計画には、純粋な関心だけでなく、カリキュラムの観点で説明可能かという視点が入ってきます。その際に金田氏が示されたような「私的な」時間の性格が変質するかもしれないといった問題は、私が教育哲学の視点から考えてきた問題です。

講演を受けて次に頭をよぎったのは、現在の日本の教育政策です。講演後、私は金田氏の考えが、「ゆとり教育」の理念に近いのではないかと感じました。もしそうであるならば、現在の教育政策は金田氏の教訓とは逆方向に進んでいるように感じました。最近話題のアクティブ・ラーニングもこの講演の趣旨に近い考え方ですが、そこで行われる活動はより明示的な目標設定の下になされる傾向にあります。こうした情勢を思い起こし、金田氏が「私的な」時間に経験されたオープン・エンドな活動を学校教育のなかに担保することの難しさを感じました。

GSSやアクティブ・ラーニングを含め、最近の教育政策はある点で課外的な活動を生かすための貴重な助けとなっています。しかしその一方で、注意を怠ればマネジメントや有用性の論理により「私的な」時間が浸食されてしまうかもしれません。今回の講演はこうした私の教育哲学の研究への関心を大いに刺激するものであり、金田氏であればこうした問題にどのような提言をなされるのか伺ってみたいと感じました。

GSS 実習系科目報告会の開催

伊藤伸幸 GSS特定准教授

GSS履修生による第16回実習系科目報告会が2016年11月29日に開催されました。報告会では発表者1名につき10分のプレゼンテーションと10分の質疑応答の時間が与えられ、それぞれの学生が自身の国内外における活動の成果や今後の課題について報告し、評価を担当したカリキュラム委員会の教員や学生らと活発な議論を行いました。報告会（表）では、農学、アジア・アフリカ地域研究、経済学、教育学、工学、地球環境学、情報学、医学、理学のそれぞれの研究科から計18名のGSS履修生が参加し、フィールド実習やインターンシップ、国際学術交流、産学連携プロジェクト、国際共同プロジェクトの活動について報告しました。異なる分野を専攻する学生が実習系報告会を通じてお互いの活動を知り、それぞれの研究の学際性をさらに高めていくことを期待したいです。

表：第16回GSS実習系科目報告会発表題目一覧

名前	科目	題名
Mariko Matsumoto	FT	Field training in the Philippines
Hiroki Segawa	FT	Seeing is believing: Let's go the field
Taro Shiotani	FT	Field Training in Taiwan
Shobha Poudel	IA	Climate change, crop yield and food security in the mountainous region of Nepal
Sajid Nisar	IA	Summer School on Control of Surgical Robots: COSUR 2016
Ryosuke Kajita	IA	Presentation at International Conference in Philippines and Indonesia
Naoko Kimura	IA	Discussion and opinion Exchange on ecosystem-based approach for disaster risk management and resilience
Kota Sugimoto	IA	Phoenix Leadership Program by Hiroshima University in Fukushima
Ryo Higashiguchi	IA	Participation to World Bamboo Congress 2015 and Conference on Traditional Forest Knowledge 2016
Kensuke Asai	IA	Academic exchange with young researchers in London and Helsinki
Christina El-saadi	IC	Improving the Level of Infection Control Education in the Egyptian Dental Schools: A cross-sectional Study on Infection Control Knowledge, Attitude and Practice among Public Universities Dental Schools Students in Egypt
Fuko Nakai	IC	Collaboration Research at IASA for Developing Evaluation Methodology of Evacuation Plan
Shobha Poudel	IC	Assessment of the climate change adaptation plans and policies in Nepal
Ryo Higashiguchi	IC	Collaborative Research Project with Hungary: Connecting Network of Bamboo Research between Habitat and Non-habitat Area
Nami Fujimoto	IC	Critical and responsible citizenship: Some cross cultural perspectives and experiences
Yui Masuki	IC	Sustainable Development and Sustainable Societies Workshop for Doctoral Students from Fudan University & Kyoto University
Yukiko Tateyama	IN	Prevention and Control of Childhood Pneumonia in the Philippines
Ayako Kohno	IN	Internship in Malaysian Government Office regarding Family Planning
Ryo Higashiguchi	IU	Development of New Deer Prevention Fence for Protecting Vegetation in Mountainous Area
Ryosuke Kajita	IU	Earthquake Resistant Construction in Padang, West Sumatra, Indonesia-Industry-University Collaborative Project with Construction Company
Genta Nakano	IU	Team Hyogo Support project for Nepal earthquake "Disaster Education from Hyogo"

注) 科目名のFTはフィールド実習、INはインターンシップ、IAは国際学術交流、IUは産学連携プロジェクト、ICは国際共同プロジェクトの略です。

博士論文研究基礎力審査 (QE) の実施

勝山正則 GSS特定准教授

2011年度に開始された「博士課程教育リーディングプログラム」は、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期が一貫する学位プログラムを構築し展開することにより、我が国の大学院教育の抜本的改革を推進するものです。世界に通用する教育の質を確保すべく、京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム (GSS) では、本学の博士課程教育リーディングプログラム運営委員会の定めた博士論文研究基礎力審査 (QE: Qualifying Examination) に関するガイドラインに従って、今春に修士課程を終えた本科生に対してQEを実施しました。

2016年度に対象となる学生には、2016年4月に2016年度QE実施要領を周知しました。QEは書類審査と口頭試問から構成されます。16名の対象者は、修士論文等の要旨および博士後期課程における研究計画を提出し、口頭試問に臨みました。書類審査では、修士論文がGSSプログラムにおいて履修したこととどう関連しているか、今後の研究計画がGSSプログラムとどう関連するかに重点を置いて記述することが求められ、それらの観点からも採点審査されました。口頭試問は、1人25分（発表10分、質疑15分）の持ち時間で、2017年3月1日に、京都大学東一条館思修館ホールおよび大講義室で行なわれました（写真は試問の様子）。

提出書類や発表資料は全て英語、口頭発表と質疑応答も英語に限定され、ガイドラインの定める英語力審査を兼ねて実施されました。10分という短い時間に、上述の重点課題をどのように盛り込み、専門外の審査委員にも納得できるように伝えるかが腕の見せ所です。なかには制限時間内にまとまらず、四苦八苦する履修生も見られました。また審査委員からは、「現実世界で起こっている問題との関係性が不明瞭」、「専門家以外に伝わりにくい」、「ある一地域での事例研究を、国際性を意識していかに関世界に活用できるかを十分に考える必要がある」等の厳しい指摘も多く見られました。質疑応答では、これらの指摘に対し、これまでの経験と知識を動員して回答する履修生たちの姿が印象的でした。

QEは本年度で4回目を迎えました。QEの意図・重要性は約1年前から周知していたこともあり、今回は全員が無事に合格しました。しかし、セッションはすべての学生にオープンでしたが、他学年の参加がほとんどなく残念に思いました。QEは大学入試や最終審査にも匹敵する重要審査ですので、次年度以降の履修生にとっても、セッションに参加し先輩の発表を聞くことが有用かと思えます。また、所属専攻や学年を超えた学生間の相互理解・相互交流は、GSSを履修する大きなメリットの1つですので、このような機会を有効に利用して欲しいと切に望みます。



口頭試問に臨む学生

GSS 履修生の紹介

Koo Bonjun
クボンジュ

工学研究科 (L2)



韓

国の政府機関と国際機関における約6年間の勤務経験は、私に開発途上国の貧困と環境問題の実態を提示してくれました。さまざまな援助機関、国際機関、NGOと協働しながら、開発途上国の環境問題に協力すべきことはまだまだあると感じました。世界の環境問題の解決には国際社会の行動が不可欠で、国際的な相互協力の必要性を痛感しています。途上国援助に関わった経験に加え、私自身の専門知識を発展させることで、この国際社会に貢献することが多くあると信じています。

将来、国際社会で働くことを目指して京都大学で勉強することは、地域や世界規模での環境問題の幅広い理解を獲得する素晴らしい機会となります。健全な経済成長とともに環境の保護に貢献する方法を模索しています。

GSS プログラムは、大規模な自然災害、予想外の人的災害および事故、環境劣化などの地域的な環境変化など、さまざまな環境および災害の問題をカバーしています。私の研究は、人間社会を脅かす大気汚染に焦点を当てています。その具体的な目的は、モンゴルの大気汚染の緊急事態に対する包括的な統合災害管理計画の策定と実施です。この研究は、日本で成功裡に行われた地域社会参加型研究手法による大気汚染問題に取り組む新たな試みです。GSS プログラムを通じて、環境と持続可能な開発を調和させたより良い人間社会の実現に貢献したいと思っています。

私

は建築・建築工学の修士課程に在籍し、2016年よりGSSプログラムに参画しています。私の研究テーマは、広い地域での地震被害モデルの開発です。

2016年4月に、布田川・日奈久断層帯でマグニチュード7.0の熊本大震災が発生しました。この災害で少なくとも50人の命が失われ、3000人以上が負傷しました。そこで、この震災と熊本市の地層構造を研究することにしました。

私の研究は、新たに開発されたサイト特性理論に基づいており、マイクロ波検出器を用いてサブボトム調査を行います。2016年5月には、人為的あるいは大気しょう乱に起因する益城町における地面の低振幅環境振動である73点の波動データを収集しました。分析した後、各点のピーク周波数を得ました。これらは私の将来の研究の重要なデータです。

私は、修士課程の間に達成したい2つの重要な目標があります。第1は、強震動評価の必要条件である益城町の地下構造を評価することです。先進の理論に基づいて、岩盤上の堆積層の厚さを評価します。第2は、熊本地域の建物の地震被害をシミュレートすることです。

地震研究は、通常、異なる分野の研究者と協力する必要がある学際的研究の1つです。GSS プログラムはまさに国際的な研究プロジェクトです。私は、世界中のさまざまな分野の学者と研究トピックについて議論することができます。そして、このプログラムの授業やセミナーを履修し、多くの顕著なアイデアを得て、視野を広げることができました。GSSのメンバーとして、研究レベルを高める機会が得られることを願っています。

Sun Jikai
ソンジカイ

工学研究科 (L2)



南宮 惠鎮
ナムグンヘジン

農学研究科 (L2)



世

の中には色々な価値観が存在します。幸福や愛、もしくは名誉、出世といったものもあるでしょう。人によってその優先順位は違うと思いますが、私はそのなかでも「健康」という価値観を第一とします。その価値観のため、自然に健康と直接関わる学問に興味を持つようになり、食品生物科学という専攻を選びました。学部時代は食品の製造・衛生・栄養に関する勉強を含め、食品科学の基盤となる有機化学や生化学といった科目の勉強と実験をしていました。食品の研究は、医薬品と異なって、栄養がありながらも安価で美味しくしなければならないという点が大変興味深かったです。

大学院に入ってから研究テーマは、ミルクの脂肪を構成するタンパク質の免疫機能を探ることです。この研究がすぐに医薬品開発へ繋がることはなかなか難しいでしょうが、有用物質の探索という点で長期的な観点から研究しています。また、GSS プログラムの研究活動の1つとして、韓国のソウル国立大学の医学研究科ヘインターンシップに行ってきました。私は普段、免疫学実験をよくやっていて、医学研究で使われる実験手法と共通する点が多く存在します。インターンシップ先の研究室は免疫学分野で進んでいるところだったので、実験スキルを学ぶという点でとても有意義でした。また、他大学に研究員として所属し実験させていただくことでコミュニケーション能力を高めたりと、ある意味異文化交流ができたのではないかと思います。

これからは自分の専門研究に力を注ぐのはもちろん、GSS プログラムのなかで、学際的な知識を得ることを目標としたいです。そうすることで、実社会に存在する世界的な問題を解決することに貢献できるという、GSSの目指す人材像に近づけたいと思います。

私

はアジア・アフリカ地域研究研究科に所属し、東南アジア地域研究を専攻しています。幼いころから生物が好きな私は、「生物相が豊かなといわれる東南アジアにはどのような種類の魚がいるのだろうか」という好奇心から、カンボジアの淡水魚の生息状況と地域住民による利用状況を調べることをテーマとしました。特に注目したのは稲作と淡水魚の関係についてです。テーマ設定の背景には、かつて日本が経験した水田生物相の著しい変化がカンボジアでも起こってしまう（もしくは既に起きてしまっている）のではないかと懸念があります。

日本では高度経済成長期にコメの生産効率向上を目的として、全国的な圃場整備事業が実施されました。この過程には農業機械の導入を前提とした区画整備や湿田の乾田化および水路網のコンクリート化、用水路と排水路の分離あるいはパイプライン化などが含まれ、これによって水田環境を生息地としていた多くの生物が棲めなくなり姿を消してしまいました。かつては水田や水路で取れた魚を食べるのは一般的なことでしたが、これらの生物の減少や輸送手段の発達によって海産物の入手が容易になったことなどにより、これらを利用する文化も衰退してしまいました。

カンボジアは農業、とくに稲作が国の主要産業ですが、豊富な淡水魚資源はタンパク質源として非常に重要です。これら淡水魚をはじめとする資源を適正かつ持続的に利用し続けることは、生態系への負荷の軽減や地域文化の保全、ひいては食糧問題解決へのアプローチになると私は考えます。課題の取り組みにあたっては多分野融合的な広い視野が必要となります。所属大学院とGSS プログラムの双方を通じて多くの人に触れて刺激を受け、少しでも学際性と視野を広げられるように努めたいと思います。

小松 祥平
こまつ しょうへい

アジア・アフリカ地域研究科 (L2)



GSS 履修生の紹介

櫻庭 優

さくらば ゆう

アジア・アフリカ
地域研究科 (L2)



私

はアジア・アフリカ地域研究科の東南アジア専攻・生態環境論講座で、カンボジアの発酵食品とヒトの文化について研究をしています。学部生のときに名古屋大学のJICAプロジェクトでカンボジアに行くようになり、当時から市場の野菜の発酵食品などを調査していました。それがきっかけとなり、大学院からはカンボジアの人びとの伝統的な発酵食品の製法や、使用方法、原料となる麴やそれに使用される作物の研究を始めました。カンボジアの農村部に滞在しながらインタビューを行い、人々の文化と知恵を学ぶ社会学的な面からのアプローチと、原料の植物の分類やスターターの成分分析、ヒトの食事調査など理学的な面からのアプローチを行う研究手法をとっています。

このように文理融合型の研究で、分野を隔てることなくたくさんの考え方を学んでいこうとするなかで、GSS に入学することは私にとって必要不可欠なことでした。GSS では多種多様な背景をもつ生徒が集まり、お互いの研究を尊重し合って意見を交わしています。普段自分の研究科では得ることのできない知見を GSS で得て、さらにそれを自分の研究に活かしていくことができている今の環境には感謝しかありません。カンボジア国内のみに目を向けるのではなく、世界的に問題になっていることがいかに自分のフィールドに関わっているのかを知り、その解決に向けて考え、行動にも繋げていくことができているように感じます。また、カンボジア国内で起きている問題を世界の問題と照らし合わせて原因を考えたりするなど、GSS に入って以来、自分の見ようとする世界が広がったように思います。今後は、世界の食糧問題や途上国の衛生管理の問題と関連付けてカンボジアで食の研究を進めていこうと考えています。

編集後記

昨年度は GSS の第 1 期生の修了年度を迎え、社会のリーダーとして活躍し得る総合的な学術の素養を身につけた履修生が学位を取得し、様々な分野へと進んでいきました。今年度もまた新たな入学生を迎える季節になり、リーダーシップと学際的研究のスキルの習得を目指し、多くの学生が集まってくれることを期待しています。

GSS ニュースレター (No.15) 編集担当 伊藤伸幸

No.14号日本語版記載誤り

訂正内容：日本語版 P5.上段 サジツト・ニサルさん 所属と学年 (誤) 医学研究科 (L1) → (正) 工学研究科 (L3)

京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム

Inter-Graduate School Program
for Sustainable Development and
Survivable Societies

Newsletter No.15

平成29年7月25日発行

編集 京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
ニュースレター編集委員会

発行 京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム
京都大学学際融合教育研究推進センター
グローバル生存学大学院連携ユニット
京都市左京区吉田中阿達町1
TEL 075-762-2197
URL <http://www.gss.sals.kyoto-u.ac.jp/>